

第二百六十九話 自活に耐えた栄光の島！

“♪銀翼連ねて南の前線～ラバウル航空隊♪”お馴染みのラバウル航空隊の歌である（ラバウル小唄も愛唱された。）ところがこの歌詞にある「ラバウル航空隊」であるが、このような部隊名の航空部隊は歴史上存在していない。ラバウル（ブーゲンビル島）所在の航空隊を総称しているに過ぎない。このラバウル基地は大東亜戦争末期には、忘れられた島となってしまった。

1 ラバウルの戦略的価値と拠点化

大本营は、内南洋の守りを固めるために、豪の委任統治領であったニューブリテン島の最大の都市であるラバウルを攻略した。1942/1/20、海軍第一航空艦隊の空襲に引き続き、1/23には陸軍南海支隊が所在の豪軍を排除して占領した。

ラバウルには、逐次集結した海軍航空隊を統括する航空戦隊を新編し、各航空隊の転出、増援等を繰り返された。また、1943年末には陸軍も第6飛行師団を派遣した。

陸軍は、1942年11月、東部ニューギニア方面を担当する第18軍を新編し、17軍と合わせ指揮する第8方面軍司令部（今村均大将）をラバウルに配置して作戦指導を強化した。

海軍も南東方面艦隊（草鹿仁一中将）を同地において、第8、第9の両艦隊を指揮してソロモン、ニューギニア方面の作戦を担当させた。



2 ラバウル所在航空部隊の航空作戦

日米は、海に空に死闘を演じた。

(1) ニューギニア沖海戦（1942/2/20）帰還機は17機中2機のみ

(2) ニューギニアの戦い 一進一退の攻防が継続

(3) 珊瑚海海戦（1942/5/8～） 被害甚大

(4) ガダルカナル島の戦い（第一次から第三次ソロモンの海戦（航空戦））

ラバウルから1100km離れたガ島攻撃は零戦の航続距離の限界に近く滞空時間は15分であり有効な航空作戦は実施できなかった。1944/2までの一年半にわたる航空消耗戦で、日本海軍は、11,773機を喪失し、ソロモンは搭乗員の墓場と呼ばれた。

(5) ブーゲンビル島の戦い（1943/7～）第一次から第六次航空戦

(6) ラバウル航空決戦（1943年晩秋～1944年2月頃）

新根拠地を設置した連合軍との制空権争奪戦が展開されたが、次第に劣勢に追い込まれた。

(7) トラック島空襲（1944/2/17～）

トラック島への空襲により、海軍の根拠地として機能は喪失し、トラック島救援のために出動した航空部隊も大損害を受け、ラバウル航空隊は実質的に終焉を迎えた。

(8) 連合軍のラバウル迂回方針とラバウルの孤立

米軍は、アドミラティ諸島に上陸（1944/2/29）し、可動機もトラックに撤退してラバウルの航空基地としての機能は失われた。

3 観察

(1) 初期作戦時にラバウル所在航空隊が活躍（過大戦果報告もあった？）したことにより、ラバウル航空隊の軍事歌謡が広く膾炙した。実態は相当苦戦しているみたいだが・・・

(2) 日本は長期消耗戦を強いられ、優秀な搭乗員や大規模な損害を被った。

特にガ島の戦いには疑問大。何故ガ島に拘ったのか理解に苦しむのだが・・・

(3) 航続距離の限界に近い航空基地を根拠地としての島嶼防衛には限界がある。南洋諸島の防衛如何にあるべきだったのか。余りもの戦面の拡大の弊極まれりだ。

(4) ラバウル所在陸海軍部隊は、よく協同して、終戦まで耐えた。両将特に今村大将の仁徳に負うところ大であった。

（了）